

I 県立図書館における読書活動の推進

1 本県の親子読書活動推進の経緯

(1) 「親と子が共に伸びる20分間読書運動」(昭和35年)について

出典:「鹿児島県立図書館史」より抜粋

本館が、県民の意識と教養の向上のために努力してきましたグループによる読書網の開拓では、図書利用グループ3,000の実績をあげながら、大衆運動とまでなり得ない憾みがありました。

特に最近の数年間、本館が最も力を注いで「考える農業」を提唱し、本県産業の振興を図るために推進してきました「農業文庫」は、大方の歓迎と実績を納めながら、なお幾多の問題点があり、読書に対する抵抗は意外に大きいようであります。

そこで本館では、この現状を打破するために、過去一年間の研究実績をもって、広く県下に「親子二十分読書運動」を展開し、これによって県内限なく読書網の間隙をなくし、広く読書に対する関心と意欲を高め、親も子も読書の習慣を体得して、根強く生活の中に生かされるよう、あらゆる関係機関、団体等の協力によって、今後数年間継続的に主旨の徹底を計ろうとするものであります。

一、親子読書の在り方

毎日、子供が二十分間ずつ本を読むのを親が聞くやり方で、三日間で一時間、一か月間では十時間、一年間には十五、六冊から二十四冊以上の本を読むことになります。

一、親と子の心の結びつき

(1) 同じ主題を通じて、親と子が共に感動しあい、親と子の間に精神的な橋がかかる。

(2) 毎日親と子が二十分間ずつ努力することによって、無言の教訓を子供に与える。

一、親の側への影響

(1) 高学年の子供の読物からは広い知識を、低学年のものからは、童心がよみがえって精神生活を豊かにする。

(2) 子供の学習に参加し、関心を高める。

(3) 生活時間の自主設計への動機。

一、子供に及ぼす影響

(1) 根気を養う。

(2) 精神不安定児の治療。

(3) 物事をなしとげる喜びと自信をつける。

(4) 頭脳の鍛錬。

(5) 精神的経験を豊かにする。

(6) 理解力をつける。

(7) 読書力をつける。

(8) 偏読対策の一方法。

(2) 親と子が共に伸びる20分間読書運動の経過

○ 昭和35年から昭和40年まで

運動の啓蒙を図りながら、着実な実績を収める時期

- ・ モデル地区10地区を指定し、200冊を無料で貸付け配布
- ・ 研究調査報告書等を作成し、客観的に取組を分析

○ 昭和39年から昭和49年まで

運動の定着と発展を見せた時期

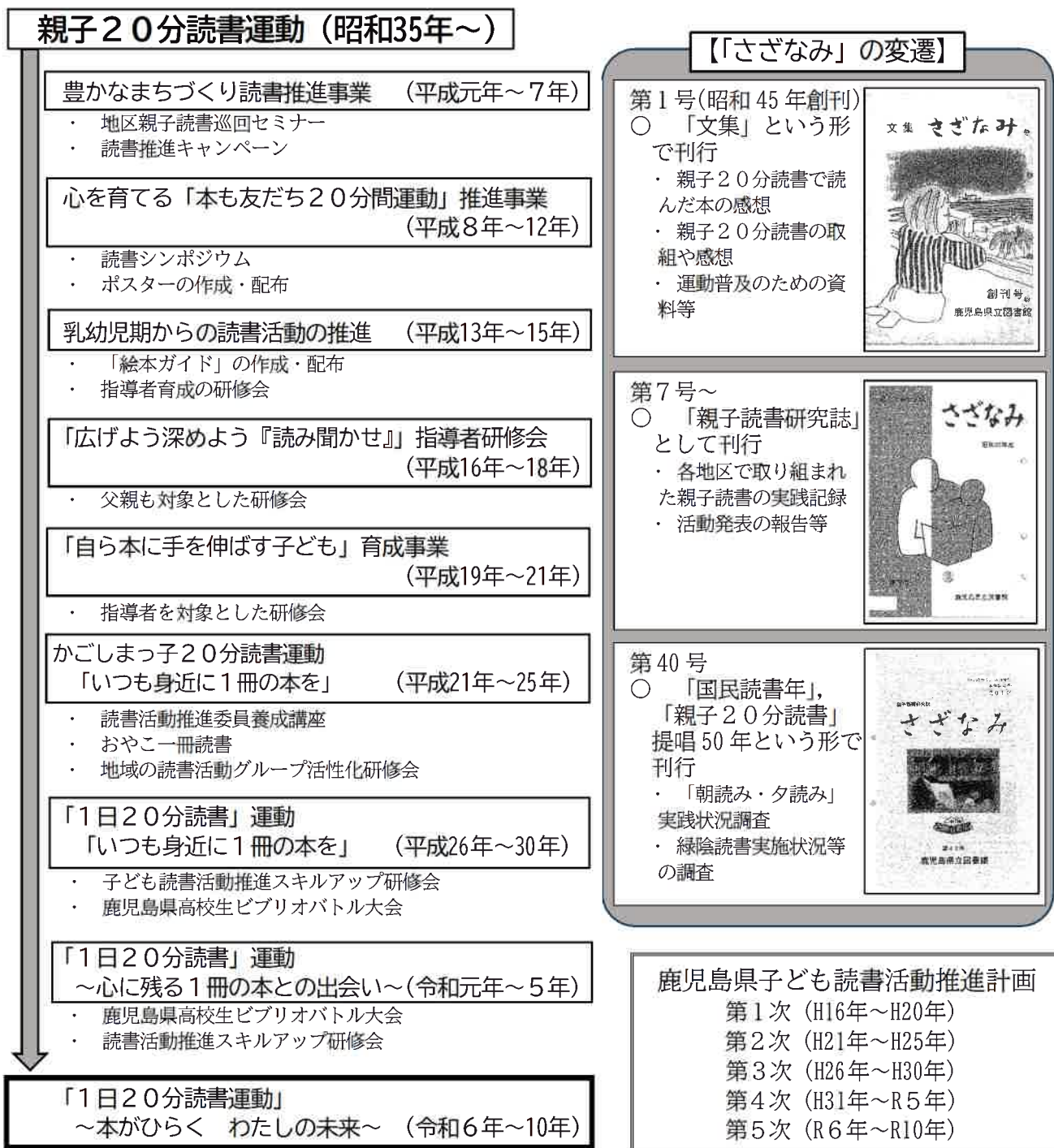
- ・ 幼児への読書啓蒙の必要性を提唱
- ・ 親子20分読書事例集の作成

○ 昭和50年以降

一層の深化・発展を遂げた時期

- ・ 親子読書研究誌「さぎなみ」の刊行、活動状況の調査の実施
- ・ 親子読書研究会の実施

(3) 1日20分読書運動へ 〈平成以降の取組〉



(4) これからの取組

第6代鹿児島県立図書館長 椋 鳩十(久保田 彦穂)氏が中心となって始まった「親子読書運動」は、時代とともに様々な変遷をたどりながら、現在まで脈々と続いています。時代は移り変わっても、読書を通じて心を育むという思いや願いは変わることなく、県内各地の公共図書館や学校において、蔵書の充実やおはなし会の実施、研修会の開催など、様々な活動が活発に行われています。今後も、親子読書をはじめとする読書活動の促進のために、各種機関との連携を図りながら優れた取組を紹介するとともに、研修会等の企画・運営・充実に努めていきます。